明治聖德記念學會紀要　第三卷

研究

倭論語の神託に現はれたる宗教思想の位置

文學博士　加藤玄智

明治聖德記念學會の研究所にて、偶星野長井兩文學士と共に、倭論語を研究せしもあり、今その研究の一端を、本題目の下に、本紀要に於て發表することとす、但し吾等同人は、倭論語を左の諸方面より研究して、本書の性質を明にせんとせり、今は唯その目錄のみを示めし、その最後の一章たる本題目より、之を世に公にし、以て識者の高教に接せんとす、蓋し本紀要紙面の都合上萬已むを得ざるものあればなり他は次號にて公にせん、讀者之を諒せよ。

倭論語研究概要

倭論語の神託に現はれたる宗教思想の位置

第一章　緒論―倭論語は如何なる意味に於て價値ありや

(一)歴史上より見たる評價
(二)思想内容上の價値
(三)我主彼從の日本中心主義
(四)時代精神の反影としての倭論語の史的價値

第二章　倭論語てふ書名に就きて

(一)孔子の論語より來る
(二)孔子の論語と我が倭論語との異同

第三章　倭論語の作者は誰そ

(一)倭論語の全篇同一の文體は同一作者の筆に成りしことを反照す、―且つ何れの部分が署名撰者中何人の撰する所なるかを明にせず、―書中の貴人名家等の言行錄の出所は一切之を示さず
(二)時代を逐ひて次第に編み上げられしと公稱せる本書が次第不同なるは當然の結果なり、然るに本書の序文は何が故に其次第不同なる所以を强辯するに努むる乎
(三)本書の辯護に御年十三の後奈良院の詔を矯む
(四)本書の文體は德川時代の俗書たる軍書のそれに類す
(五)本書の述作上の方針は本書の結尾として戔然法親王の口を藉りて表はさる(倭論語、十、三五)
(六)倭論語の底本としての神道五部書、砂石集、名法要集等の各種書籍

(七)本書に署名せる各撰者の官位等の記入に分明なる誤謬あり、是れその各撰者が眞の撰者に非ずして別人の後より諸撰者に假托せしを反照せざる乎

(八)公卿補任及び清原系圖に據りて攻證せられたる本書各撰者の生死年月上の誤謬

(九)伊勢貞丈、高田與清等の倭論語に關する評論及び應仁後記の記事

(十)倭論語中の記事は何が故に近江一國にのみ特に詳しくして萬事を佐々木氏に緣故あらしめんと努むる乎

一、本書は諸國の神社の神託を擧ぐるに當り諸國の神社數に比して近江一國の神社數甚だ過多に失するは何故ぞ

二、我國古今の有名なる武將は之を附會的に近江の國に關係あらしめんとする努力の跡歷然たり

三、書中神社の數一〇八あり是れ佛教の一〇八煩惱の思想より來りしものあらんもこは又近江國比叡山の一〇八社に擬せしものならん乎

(十一)諸家大系圖及び江源武鑑等の作者澤田源内と倭論語

(十二)歸結―作者の眞僞と書物内容上の價値

第四章　倭論語に使用せられたる資料

(一)資料の種類

(二)資料の性質及びその取扱方に就きて

(三)倭論語作者の想像上に畫かれたる記事

(四)同一思想の重複

第五章　倭論語の流布と刊行
第六章　倭論語の歐語譯
第七章　倭論語の神託中に現はれたる宗教思想の位置
(一)宗教思想發展の徑路
(二)外形主義の打破と內部精神の尊重
(三)唯心論的傾向
(四)純乎たる自發的倫理主義
(五)汎神論的傾向
(六)普遍主義の發露と理想の現世實現
(七)多神教と唯一神教との調和的傾向
(八)日本中心主義の下に支印兩文明の攝取
(九)國家主義の鼓吹

第一　宗教思想發展の徑路

東西古今宗教發達の歷史を採りて之を考ふるに、宗教は自然的より倫理的に、外形物質の末に拘泥せしものより、內部精神の方面に向ひて、次第に進展し來りしものなり。例之吠陀の宗教が婆羅門教佛教を生みたる、シナイ山上に現はれたる嵐の神ヤーヱー

Jahveを崇拜せし所の所謂Jahvismより、紀元前八、七世紀頃の預言者の教Prophetismを出し延きては耶蘇の基督教となりしが如き、一に皆此徑路を辿りしものならざるはなし。我神道の宗教的方面に至りても亦自ら此徑路を歩みし跡あり、その自然的宗教の時代より次第に發達開展して、遂に倫理的精神的宗教を玉成せるの狀、歴々徵す可きなり。而して倭論語中に現はれたる神託を初めとして、倭論語全篇を通じて、その宗教的思調は一に倫理的精神的の響をかなでつゝあるものなり。請ふ左に少しく此方面を倭論語の本文に由りて觀察せん。

第二　外形主義の打破と內部精神の尊重

身體を水にて清め、海水に入りて肉體を洗滌するのみ必ずしも眞の清淨に非ず、身體を淨くすると同時に又心垢の洗滌を努めざる可からざることを主張して、外清淨に加ふるに內清淨の必須缺く可からざるに想到したる者、是れ倭論語の神託を通じて一貫せる思想なり。否そは寧ろ外部肉體の清淨よりも、內部精神の秡攘こそ一層大切のものたるを力說せんとするものなり。故に倭論語春日大明神及び北野天神の神託に曰く

春日大明神神託

たとへばもろ〳〵の人、常に清き室をかまへ國土の珍寶を供し、七重のしめを張り、數百日心を苦めて我をいのるとも、その心邪に慳貪ならん家にはいたるまじ、たとへば重服深重のふかき家にも、慈悲つねにあらんその室には、まねかずといふとも、かならず影向あるべし、我つねに慈悲を神體とするが故なり(一、一一)

北野天神神託

もろ人の我が前に來りて、願を遂げむとならば、その心いつはりなく、内外清くして、かゞみにむかふが如くしていのるべし(同上、一四)

是れ豈に　明治天皇の御製に見ゆる、

榊葉にかけし鏡をかゞみにて
　人も心をみがけとぞ思ふ
うち向ふたびに心をみがけとや
　鏡は神のつくりそめけん

なるものに非ずして何ぞ。

香取大明神神託

それ神明のいむ事の穢は衆生の穢惡の心をいましむるなり、直きものには汚るゝと云

はすなべての人の心の正しく直からんがためなり。いさぎよき人の心のそこすまば清き神明の影をうつさん(同上、三一)。

春日大明神神託

もろ〳〵の人等、神明のたすけをうけんと思はゞつねに慢心をしりぞけよ、たとへば一毛の慢心の神明をへだつること大雲のごとし(一、一一)。

是れ豈に十四紀に於ける坂士佛の所謂

當宮參詣のふかきならひは、念珠をもとらず、幣帛をも捧げずして、心に祈る所なきを內清淨と云ふ。潮をかき、水をあびて、身にけがれたる處なきを外清淨といふ。內外清淨になりぬれば、神の心と吾心と隔なし。既に神明に同じ、しからば、何を望みてか祈請の心あるべきや。これ眞實の參宮なりとうけ給はりし程に、渴仰の涙とゞめがたし(大神宮參詣記、群書類從、一、九四〇)。

夢窓國師、夢中問答(禪宗寶典、七八六)を參照せよ。

若くはピタゴラス學派の旦暮服膺を敎へし、

神への勤は我が精神を清淨純潔とするより外ある事無し、若し現世にて神に比すべきものありとせば、清き心の外あることなし(Vide Carpenter, Comparative Religion, p. 221.)

拙著宗教學三六六―三七〇頁參照。

と云へるものに非ずして何ぞ。倭論語の宗教思想は明かに精神的階段に到達せしを想見すべきなり。

又春日大明神神託に曰く、

もろ〳〵の人よ、善神は法味をもて力とするが故に、よろづのくだ〳〵しきものの供物をこのまず(一、一一一)。

是れ豈に神道五部書に見ゆる、

神明饗(ウケテ)德與信、不求備物焉(御鎭座本紀を看よ)。

而てこは又、イスラエルの預言者ホセアの所謂、

我(神)れはいつくしみを喜びて犧牲を喜ばず、神を知るを喜ぶこと燔祭にまされり(ホセア、六、六)。

と云へるものに非ずして何ぞ。

故に倭論語に於ては秡攘の意義、外形的より精神的となるに至れり、曰く

聖德太子寶勅

吾神明の解除は、もろ〳〵の病をなほし治め、老せぬ身の妙なる教なり、うせぬる身な

きの良藥なり。されば言葉最尊にして、もろ〳〵の法の心地、萬行萬善のみなもとなれば、此國は是れ卽身是神是佛のところなれば、人の國吾國の人なべて神德を蒙るべし、おろかなる心あらんものは、水のものにしみわたれるが如くにして、日に月にかさねて根の國に入り落ちぬべし(八、四及び五)。

第三　唯心論的傾向—精神教

既に外部肉體の方面よりも、內部精神の方面に重きを置けり。此に於てかその教旨は自然唯心論的傾向を採り來らざる可からず。而して宗教思想にして此に至らんか、そは則ち眞の意味に於ける精神教の域に到達せるものなり、神を拜するに所謂「靈と眞理とを以てせん」とするものなり、故に曰く

若狹彥大明神神託

みな人の直き心ぞそのまゝに
神の神にて神の神なり(一、三二)

能登比咩大明神神託

あめにならひ地にうけたりし人心

まがらざりせば卽ちの神(同上、五二)

宇倍大明神神託

もろ人の心は神のみあらかなれば、直きときは神なり、慈悲の心深かければ佛なり、神佛一如の身をおもふ可し思ふべし(同上、五六)。

宇佐八幡宮神託

衆生の心不善なる時、神明をいのりもとむと云ふとも、その心にやどることし。直き心にして、正しき時は、いのらざれども、吾つねにそのいたゞきにうつり居て守らん、衆生の心は神のみあらかなるが故に、そのみあらか惡しければ、ずむことなし(一、四三)。

是れ實に、衆生本來成佛と說き、心佛及衆生是三無差別と敎へ、是心卽佛、若くは卽身成佛、と談ずる佛敎の唯心論より、換骨脫體し來れる思想にして、倭論語作者の底本とせし形跡の見ゆる砂石集に所謂、

情塵已遣、人乘卽是眞諦(四、下、三六)。

なるものにして、或は又同書に、

妄念は凡也、道念は佛也、此故に只妄念を離るれば、如々の佛也と云へり。佛性本來是有、只へだつる所妄念也(七、上、七)。

と云へるものに同じく、而てこは又實に二十一社記に見ゆる、身正心明、我身即神也、と云へる思想にして、禮記の內則に、淸明在躬、志氣如神と云へるものと相距る遠からざる所のものとす。請ふ左に更に一二例證に由りて、倭論語の宗敎思想が唯心論的傾向を採れる所以を明にせんとす。

淺間大明神神託

わが人よ、心なかれ、心なければよく神明の德にのぼるなり、わづかに念慮にわたれば人心を去るなり、人心をされば、畜類となるぞ、人をしてかくあらんぞ、我れたへがたくいたみ、われつねになげくのみ(一、二九)。

(砂石集に曰く、道行何耶、一切無染着者是也、眞有衆生、無始封着是此非彼是得非失、因之起染纏縛有獄、故世鈍者、多著財色、有利者多貪名見(四、下、二六)と云へるものを比較せよ。)

多賀大明神神託

心あれば罪あり、心なければ罪なし、有無の心は我れこのまず、たゞありのまゝなるもろ〳〵の心を以て、玉の緒はゆたかに廣き心より、いつまでもつきじものをや(一、一九)。

倭姫命曰

伊勢兩宮ははじめなく、をはりなく、大元宗神なり、一念不生の御みたまなり……

夫神明の内證は鏡の如し、一物をたくはへず、萬物をうつせり……吾神道は一念を專らとするものなり……なべての人よ、無心無念にして神明に向ひ奉れ……いはゆる佛の本地は衆生なり、衆生の本地は一靈なり、一靈の本地は神明なる事をしるべし。

はじめをはじめとして、はじめのはじめに入り、もとをもととしてもとの心にまかせば、あめの神のいきをなめん(七、六)。

第四　純乎たる倫理主義の發揚

既に引用せる所に由りても、自ら明かなるが如く、以上の神託が、其正直を教え、慈悲を尊べる所、倭論語の宗教思想は、明かに倫理的となれることを知る可し。又その内外清淨を主張して、精神卽ち心の清きを以て、重要事項とせるが如き、以て察す可きなり。故に倭論語は伊勢兩宮を兩親に擬して、之を以て個人々々の身に在す伊勢兩宮と教へ、その神に事ふる内外清淨なるものは、畢竟兩親に孝養するの外あらざることを明かにせり。

曰く、

龍田大明神神託

なべての尊き卑き人、あめを祈り地をまつりて、もろ〳〵の神をいのらんより、汝が父母によくつかへよ、すなはち兩親は內外の神明なればなり。內明かならで、外のみをねがふ可からず(一、一九)。

而てこの思想は眞宗の存覺の所謂、

凡人事天地鬼神、不如孝其親、二親最神也(報恩記、眞宗聖教大全、七一九)。

なるものにして、この文は存覺も云へる如く、四十二章經に淵源し、而てそは又釋迦の所謂、

居孝事父母、治家養妻子、不爲空之行、是爲最吉祥(法句經、吉祥品)。

梵天及火神、阿闍梨諸天、若供養彼者、應奉養二親、今世得名譽、來世生梵天(別譯雜阿含五、長、五、二八)。

なるものなり。而てその思想は我國に來りては春日權現靈驗記繪目錄に於て、最も巧みなる比喩を以て說明せられたるを見る、曰く

狛行光は興福寺の舞人なり、生年十六歲にして……より〳〵社頭に參りて、密にその舞を奏すること年月になりにける、あるとき重病……息たえ……閻魔の廳に至りぬ、こゝに氣高き人、王宮にいたり給ふ。……王にの給ふ樣、この男我に忠節ふかし……

願くは我に許す可しとの給ふ、王仰に從ひぬ。……行光怪みて……抑誰人にて御座るかと申せば、我は春日大明神なり、汝若し地獄や見たきと仰せられ……地獄の有様見せ給ふ……一々に見て後に如何なる方便にてか此報を免る可きと申せば、父母に孝養す可し。孝養は最上の功德なり、もしようつとむれば地獄に落ちずと敎へ給ひけり（群書類從、一、五三九）。

如上純倫理的宗敎思想の高調は、倭論語に於ては又麗はしき日常道德の敎訓として現はれたり。

倭論語の楠木正成は曰く

仁と義と勇にやさしき大將は
火にさへもえず水におぼれず

倭論語の藤忠衡曰く

將として、忠節を父とし、慈悲を母とし、不道を他人とし、民を子とし、此四德を行ふを上とす、四德は天地の四季にして一もかく可からず（五、三四）。

倭論語の夢窓國師曰く

慈悲、正直、思案、堪忍、和合、爲城廓、油斷、過奪、諸遊爲大敵（九、一四）。

と、是れ孟子の所謂、

仁人之安宅也、義人之正路也(離婁上)。

禮記に所謂、

儒有、不寶金玉、而忠信以爲寶、不祈土地、立義以爲土地、不祈多積、多文以爲富(儒行、第四十一)。

にして、本朝文粹に所謂、

吁嗟聖賢之造家也、不費民、不勞鬼、以仁義爲棟梁、以禮法爲柱礎、以道德爲門戶、以慈愛爲垣墻、以好儉爲家事、以積善爲家資、居其中者、火不能焚、風不能倒、妖不得呈、災不得來、鬼神不可窺、盜賊不可犯、其家自富、其主是壽、官位永保、子孫相承、可不愼乎。

と云へるものにして、維摩經の所謂、

法喜以爲妻、慈悲心爲女(佛道品)。

なるもの、大賢の古迹記に

智慧爲母、方便爲父、廣攝衆生、爲自眷屬、空寂爲家、法喜爲婦、慈心爲女、至誠爲男、雖在居家不着三有。

と云へるものに外ならず。

釋迦亦曰く

信戒爲法軛、慙愧爲長縻、正念善護持、以爲善御者、捨三昧爲轅、智慧精進輪、無著忍辱鎧、安隱如法行、直進不退還、永久無憂處、智士乘戰車、摧伏無智怒、

（雜阿含、二八、長、三、六四）。

と。而て、こは又エフエソ書に所謂、

汝等立つに、誠を帶として腰に結び、義をむねあてとして胸に當て、平和なる福音の備を鞋として足に穿き、此外信仰の盾をとるべし、此盾をもて悉く惡者の火箭をけすことを得ん（六、一四——一六）。

と云へるもの則ち是れにして、如上の佛儒耶等の敎の中に散見せる諸思想に比較對照し來れば、倭論語の思想信念が、如何に純倫理的の至境に到達したるかを見るを得可きなり。

倭論語に於ける北野天神は、正義公平の守護神として託宣して曰く、

我が罪ならぬ罪をうけんもの、我れをたのまんに、一七日のうちに、その願、心の如くならずば、我れ神といはれじ（一、一四）。

と。倭論語に於ける神は、一方正義と公平との神なることは、上に既に引照せる所に由りて明かなり。而かも春日明神の神託に現はれし如く、他方には、その神は又慈悲の神

なり。十惡五逆の罪人、五障三從の女人をも、等しく濟度せんとする神なり。故に曰く、

伊都伎島大明神神託

……衆生一度參詣して……思をのべていはむものをば、……必ずその心の如くならしめん。然れど直からぬ者のたのめるぞくるしき、大悲のちかひすてざれば、彼も又すつる事なし(一、三九)。

又倭論語は僧性信の口を藉りて曰はしめて曰く、

人有りて繪像木佛を供養すれば、眞佛あらはれ、甚感應をなす。人また慈悲を施せば福神是れをよろこびて寶珠をあたふ。なす事あるものは來ることあり、なすことなきものは來ることなし(八、二〇)。

第五　汎神論的傾向

古代の神道は八百萬の神を立つ、之を宗教的に見るときは、多神教なること、恰も古代希臘の宗教が多神教たるに酷似す。而も希臘に於ては、その多神教的傾向中、早く既に汎神教卽ち萬有神教の萠芽を見るに至りしことは、人の能く知る所なり。斯くして希臘哲學の鼻祖タレースが「萬物皆神々に充てり」と絶叫せる言葉の中には、自然に萬有神教

の曙光を認むるを得可く、又アラトス Aratos は萬物皆至上神格たるツオイス Zeus の顯現に外ならざることを道破して、

一切の街衢は、皆ツオイスに充てり、市も港も海も、我等は神無くしては生くること能はず。……蓋我等はツオイスの苗裔なればなり（原文抄譯、拙著宗教學、二七四）。

と說くに至れり。是れ希臘の宗教に於ける、その古代の多神教より萬有神教と唯一神教との一經過を明示せるものなり。然るに倭論語の神託に現はれたる思想に於ては古代日本の多神教的思想は萬有神教を以て着色せられたる形跡あるを認むるを得可し。勿論倭論語の作者が百八社の神々を列擧せる、所は、尙明かに多神教なりと雖も、其神託中に現はれたる思想に至りては、既に業に汎神教的傾向を十分に流露せり。故に曰く、

粟鹿大明神神託

空晴れて嵐に松のひゞきこそ
あらはれ出でし神の心よ（一、三五）

是れ豈に東坡の所謂、

谿聲便是廣長舌、山色豈非清淨身

と云へる萬有神教觀に非らずして何ぞ。

大山積大明神神託

吾神明は法の中には日天子、又は大日遍照也、垂跡を滄海の龍神にあらはれまして、三界の衆生の願を叶へます、法の人もおろかに思ひ奉るべからず、天地萬物皆我神明なることを知るべし(一、四一)。

伊都伎島大明神神託

わか國の人、わか名をむかし知らざりしゆへに、今の世に生れていやしきに苦しめり。我天上にては日の神なり、中央には聲をあらはし、大地のうちにかくれては萬物を生じ、海の中には八大龍王となり四海にその德を施しぬ(一、三八)。

而て倭論語作者は、斯く宇宙萬有に顯現せる神を以て、ストア哲學者と同じく、理と見、又儒教哲學に由りて直ちに之を誠と解するに至れり。故に曰く、

玉前大明神神託

もろ人よ、理に逆ふこと勿れ、理にさかへば天の神の心にたがふぞ、理と云ふは、天なり、地なり、神なり、思ふ可し(一、三〇)。

鹿兒島大明神神託

益人が心に誠あれば萬物皆したがふ、益人が心に誠なき時は萬物一としてしたがふ事なし、誠と云ふは天なり地なり神明なるが故なり(一、四四)。

第六　普遍主義の萌芽と理想の現世實現

斯く萬有の中に神を認むる以上は、草木國土悉皆成佛ならざる可からず、狗子にも佛性を具せざる可からず、矧んや人類をや。

佛も一度は凡夫なり、我等も遂には佛なり(平家物語)。

との思想ともなりて現はるゝものなり。神性卽ちヂビニチーを具足せる人類はその意味に於ては異同あることなし。此に於てか後來之を擴充せば四海兄弟の思想亦自ら此に發露し來らざる可からず、故に熱田大明神神託に曰く、

天が下の諸人よ、つねに神明の直きみことを身にうけて、天を父とし地を母とし、萬物を兄弟として、うらみなくかなしみなき此神國の、三界にまされるを樂まん。(一、一八)。

天地を父母とし、萬物を兄弟とせよと叫ぶに至りては、耶蘇の同一天父の膝下に在る吾人人類は同胞兄弟なりと說くに類し、倭論語はその普遍主義の萌芽を有するものと謂はざる可からざるなり。

既に斯かる普遍主義の根本義に到達せる倭論語の作者は、此點よりは、その眼中神道佛道の區別なきに至れり。而してこは倭姫命の神託中に、「佛法の息をしりぞけよ」(和論語、一、四四)と云へるものを、同一倭論語中に收錄せるものとは、自ら矛盾するものなりと雖も、倭論語作者は、此矛盾を冒して迄も、一方には普遍主義の自覺の下に、神佛のけじめさへ沒却するに至れり。故に曰く、

正八幡宮神託

もろ人等が子を思ふ心、身を思ふ心、みな〳〵ふかき罪なり、しばしも所緣をはなればめでたき事にこそ、神明もその心にやどりなん。もろ〳〵の法の中には座禪の床こそ殊勝なれ、我つねに禪室の床のほとりを守るのみ(一、三六)。

斯くして神も佛敎を守護することを認容するの思想に到達せり、否此正八幡の神託なるものは、神をして佛語を斯く迄語らしむるを見るに至れり。是れ豈に倭論語作者の頭腦には、神佛の區別は事實存せず、神佛の兩者渾然たる一體を爲して存在せるを見る。彼れ作者の眼中、既に國神蕃神の區別を以て神佛二敎に接せんとせるの痕跡毫も存せざるに至れり。

既に宇宙間の事々物々、皆神性を具備す、天國淨土、豈に之を遠きに求むるの要あらんや。

娑婆卽寂光淨土たらざる可からざるなり。そは尙釋迦の有餘涅槃が現世的なりしと同一轍に出づ。若夫れ眞如外に非ず、身を捨てゝ何れにか求めんと說き、卽事而眞と敎ふる以上、現世卽淨土なりとの思想となりて表現し來らざる可からず。故に曰く、

湯殿山權現神託

一切の衆生世のことわざをすて、日に月をかさねて、身を淸め心をきよくし、我まへに來らば、現世に淨土をおがませ今生の願一として心のまゝならぬといふことなし、我れ日本にかくれ住みて、大日遍照の臺にむかへんが爲め、外には淨不淨のけがれをたて、內には大悲の日のひかりをかゝやかすものなり(一、一六、尙ほ倭論語中俊惠の語を比較せよ)。

この思想の倫理的道德上の應用としては、倭論語作者は藤資氏朝臣の口を藉りて曰はしめて曰く、

凡そ人間一大事は今日の心なり、今日をろそかにして來日あることなし、なべての人遠き事をおもひてはかる事あれども、的面の至る所をしらず(四、一〇)。

と。是釋迦の所謂、

愼莫念過去　亦勿願未來　過去事已滅　未來復未至　現在所有法　彼亦當爲思

（中阿含、四三、戾七、一〇）。

なるものにして、耶蘇の所謂、

是故に明日の事を憂慮すること勿れ、明日は明日の事を思ひ煩へ、一日の苦勞は一日にて足れり（馬太傳、七、三四）。

の思想と相距る遠からざるを見る。

第七　多神教と唯一神教との調和的傾向

神道は、本來多神教なり、而てそは一方にては汎神教卽ち萬有神教的傾向を有するに至りしことは、前既に說明せしが如し、而もそは他方にては唯一神教的傾向をも發露し來れり、恰も眞宗が佛教哲學の汎神觀の下に在りて、而も阿彌陀一佛に歸命すべき唯一神教的傾向を呈し、而てその間亦必ずしも諸天善神存在の思想とも矛盾せず、多神教的汎神教的唯一神教的傾向が、眞宗の教理に、渾然として現存せるあるは、人の能く知る所なり。今倭論語中の神託に現はれたる思想、亦此傾向を示せり。故に曰く、

平岡大明神神託

したがへる人、一神を禮拜するとも、もろ〳〵の神の心にかなはんなり、たとへば千々

の鏡をかけて、人ありこれに向はんに、いづれのかゞみかその影をうつさずといふ事なし、ふたつ心のおこるより、くだ〳〵しき心にはくだりて、まよひの海にしづむなるべし(一、二一)。

倭論語の源算は曰く

一佛一尊に能く供養禮拜するに、もろ〳〵の佛是をよく請る事は、たとへば百千の鏡をかけて、一人行きて是をみるが如し、いづれの鏡か、そのかげを移さずと云ふことなきが如し(八、二〇)。

金峯山大權現神託

したがへる人の中に一人あめの神を禮し奉れば、もろ〳〵の佛神歡喜して、このもの心を照し、一日一夜の禮拜するものあらば、現世の難をのがるゝのみならず、三世の佛の加護あり、……五戒をたもたんものは、諸天善神前後に守護しましますゆへに天魔外道皆此人のためにしたがひ、かへりて守護を加へ恐をなすものなり(一、二〇)。

第八　日本中心主義の下に支印兩文明の攝取

倭論語の一大特色は、卜部家の神道思想を繼承して、儒佛を排せずして、而も日本中心主

義の神道を樹立せる點に在り、詳言せば佛本神迹の本地垂迹說に非ずして、却て神本佛迹の本地垂迹說を主張せるものなり、尙一層廣く之を云へば、印度の佛も支那の聖人も、畢竟神道の神々の、所を換へて現はれたる一表現に外ならず、佛敎といひ儒敎といひ、所詮は我神道の形を變へて彼の土に行はれし敎に外ならず、要するに神道は根幹にして儒佛の二敎はその枝葉なりと主張するに在り。故に倭論語の大織冠鎌足は曰く、

もろこしのふみのみならず、西天のをしゑを修し得て、わが日の本の神明のみことのりをみて、あさはかにおもはん衆生をば、我れその家にいたりて、或はみどり子を失ひ、或は重き病をさづけ、そのしたがふ者をしりぞけ、或は火亂神をして燒き亡ぼさん、西天震旦の敎をきらへるには非ず、本をすてゝ末を取る事をいふなり、佛法儒道も吾神道の潤色とせんは尤もこのむ心なり、神明のおきてをして儒佛の潤色とする事勿れ（一、四五）。

今之を唯一神道名法要集の文に比較すること左の如し。

大織冠仰云、吾唯一神道者、以天地爲書籍、以日月爲證明、是則純一無雜之密意也、故不可要儒釋道之三敎者也、然雖爲如此、爲唯一之潤色、爲神道之光華、廣存三敎之才學、專極吾道之淵源者亦妨哉（續群書類從、三、六六〇）。

海神大明神神託

あめのかみ四方の國にみことのりして、西天に出でゝは一切衆生を導く大士と生れ、世の獨尊として三界の神祇佛陀を誘引して、種々說法し、震旦にては孔老回の三聖と出で給ひて、今日の直き心を示す、皆是れ我が神明の物に應じ事にふれて正しきことを示さるゝの外なきにや、なおざりにおもう事勿れ(一、三七)。

倭論語の藤兼倶卿は曰く

夫吾神明は、上非想非々想、下界金輪に至りて、御身を分けて、もろもろを導き給ふ、天竺國にては獨尊と化生し三世の業を說きて、一切の衆生に因緣あることを知らしめ、慈悲の門をひらけり震旦にては儒道をひろめて仁義の五をしらしめ四州の內至り不給所なし、御鎭座は此國なり。故に四方の國にしてひろめおしへ給へり、その法みな〳〵もとにかへるの理にして、今の日本に渡れり、神道佛道儒道是一神の御法なり、しかれども御鎭座の此國に於ては、直に實正の言をたがへぬなれば、出家儒家の者神前に憚るは、元は元の心なる故なり。今世の神道を學ぶもの、此理に疎くして、一向に佛道の敎を嫌へり、是れ吾神明廣大無邊なる事を詳はしく知らざる所より起れり(四、四八)。

倭論語の藤兼孝公曰く、

外の國より、我日の本の神風を仰ぎ來れるものを、いとひすつ可からず。佛も聖賢のやからも、みな我が神明の枝葉なれば、はらひすつべからず、いとふものは、神德の德たる事を知らず(四、五四)。

倭論語の行敎曰く、

たとひ如來一代の敎法を說き得て、三千界に自由を得とも、吾神明の掟にそむき侍らんものは、ながく冥加あるべからず。殊に八幡大菩薩は大慈悲の家に影をうつし、眞實戒體の僧を守り給はんとなれば、我れ常に至りがたき道をば、大菩薩にうら問ひ奉りてしる事も、是吾神明の崇き事をしる故なり、今世の僧知惠あるは神にうとし、おろかなるは佛のみにして、神德のたかき事をしらず、あはれに覺えはべるばかりなり(八、一四)。

倭論語の俊惠曰く、

佛の敎も吾敷島の外ならじといへるに、和歌は僞りの物語なりと、ある僧のきらへるは、和歌の妙旨をしらざる人なり、和歌の妙旨にかなひぬれば、行住坐臥の當體是れ極樂とも卽身如來とも卽身是神とも自在の妙用なり、たとへば佛の道能く習ひ得て、一

宗の燈をかゝげるとも、和歌の心なからん人は佛法の妙にもかなひがたし。されば吾朝權者の、いづれか、和歌をきらひし事なし、かならず道にくらき人の、能く一方むきなる事をば云ふものなり、萬物にたえなる道をば、いかでか知らんや（八、二六）。

倭論語は、獨り神道と儒佛の二敎とは一致調和す可きことを論ぜるのみならず、儒佛兩敎の、又その精神に於て、相背かざることを主張せり。

倭論語の慈基曰く、

佛者の儒者をいなみ儒者の佛道を異端なりといへる人々、兩道ともに佛者に非ず儒者に非ず、大道は二なき事をしらざる故なり、敎のしなはかはるとも、善をすゝめて惡をこらしむの外あるまじとぞ覺ゆる（一〇、四）。

第九　國家主義の鼓吹

倭論語作者は、日本思想中心主義の下に、外來文明を攝取し、儒佛を以て我れの潤色とせんとする一種の調和主義 syncretism or eclecticism を以て滿足せず、時に極端に國家中心主義に流れて、外來文明を激排せんとするに至れることあり、是れ本書作者の愛國的至情の汪溢して、此に至れるものか、故に曰く、

天照皇太神宮寶敕

もろ〳〵の生く人等、天地にしたがひて玉の緒をつぎ、すべらみをやをまつり、心ののりをまさしくし、その源の根をふかふし、宗廟の神をうやまひよもの國をしたがへて、天の位の貴きことをみて、そのわざを天が下にひろむべし……

葦原瑞穗國者我子孫可爲主之地也(一、九)。

此我が建國の根本的思想は倭論語中藤公蔭卿をして云はしめて曰く、

君主臣下をあいし給ふは御子の如く、臣又君につかへ侍るも、父母をしたふが如く侍れば、君は天にして臣は地にして、あめつちと久しかるべし(三、三五)。

是れ雄略天皇の詔として傳へらるる

義乃君臣、情兼父子(日本紀、十四、國史大系、一、二五八)。

聖德太子の憲法十七條に、

君則天之臣則地之、天覆地載、日月順行(日本紀、二十二、國史大系、一、三七七)。

といへる敎を偲ばしむるものありて存するなり。

愛宕山大權現神託

吾れ常に王法を守り、國家の安全を守るが故に邪見の者の家を滅す(一、一五)。

熱田大明神神託

天照神のをしへにたがはで、すべらみことをうやまひませ、そむくかたあらば我神前に來りてその名をあげよ、かならず敵をくだきて心のまゝならん(一、一八)。

鹿島大明神神託

われつねに、此葦原の中津國の衆生をめぐみて、天の神のみことのりをうけ、異朝の兇徒をしりぞけ、天魔地魔の鋒をくだく、此國の者一人も我が神德を蒙らずといふ事なし、神明につかへまつるもの、國に多きときは、我れちからを得て、魔軍日の下の雪の如くに消失せぬ。國に神明につかゆる者すくなき時は、我力おとろへて毎度に心をくるしむ、魔力ばやゝもすればつよく神力はやゝもすればよはし。是唯もろ人の心或時は月氏國のをしへにうつり、或時は西天の敎にはしりて、神道を思ふものなきが故に、我れつねに苦しむ。異國の敎もわが神道の潤色ならば用てもよし、一向に本をすてゝ末にちかづき、本の心を失へるぞくるしき(一、一六三及び一七)。

大幡大明神神託

あまてらす神のをしへを益人の
直き心にうけやたもたん

あめつちのやしないたてしかひもなく

外のおしへを守る世の人(一、三四)

杵築大社神託

益人が、わが神國のおきてを守らで、外に心をうつしなば神明のあたなれば、我眷屬の神をつかはし、その玉の緒をうばひとらん、諸の神をまつらんに、我をまづ先きにせぬ衆生の願は、よもとげさじと思ふ(一、三六)。

住吉坐荒御魂大明神神託

我國の人は我神の子なり、親の敎をうしないて、あらぬ方のをしへにしたがふは我子にあらじ、我子にあらねばかれ守るによしなし、是れ天照らすみことの敎なり、我が思ふ益人よたもちたもて(一、三九及び四〇)。

倭姫命神託

それ天を貴み、つちにつかへ、神明をうやまひ、みおやをまつり、宗廟をたやさずしてあめのしわざをよくなし、佛法のいきをしりぞけて、神祇を再拜し奉れ、益人此事をおろかに思ふこと勿れ、おろかなるものはよろづたがふべし(一、四四)。

仁德天皇敕曰

夫吾日の本は、三千世界の中にすぐれたる寶山國なり、西天にては我國をさして大日遍照國とあがめり(二、七)。

＊　＊　＊　＊　＊

以上、いさゝか倭論語に現はれたる神託を中心として、その宗教思想を窺へり。仍て今や本論文に筆を擱かんとするに當り、我等が研究の際、先づその第一章に論定せんとせし所のものを以て、一先づ本論文の結尾とせん。曰く

第十　倭論語は如何なる意味に於て價値ありや

是れなり。今少しく左に之を攻究せん。

抑倭論語といふ書物は、彼の伊勢貞丈が「江源武鑑、大系圖、和論語等の類皆僞書なり故實の考に用べからず」(貞丈雜記十六卷五十五紙)といへるより、我國の純歷史家の立場よりは僞書として全然高閣に束ねられ一顧の價も無きものと相場のきまりし如く思はれたる書物なり。勿論之れも一方より觀察すれば無理もなき事にて、倭論語中の記事を一々正確なる歷史として考察せんか、斯る純歷史家の見解を生じ來るは怪むに足らず。然し他方より觀察して、倭論語が歷史的の價値に乏しくとも、亦その中に包含せる思想

の上より見來るときは、又自ら別種の價値を生じ來ることを記憶せざるべからず。詳言すれば倭論語はその何の時代に何人の筆に成りしものなるにもせよ、其中に含める思想の教訓的價値あるは、何人も之を認めざるを得ざるものなり。そは彼の舊約全書中に收めたる所謂モーゼの五書なるものが、モーゼの手に成りしものに非ずして、後世の僞作なりしにもせよ、又孔子の論語が萬々一孔子の言行錄に非ずと云ふことになりたりと假定せよ、而もその中に包含せられたる金玉の思想に至りては、その眞價を增減せざると一般、又法花經が四阿含經等に比して歷史的價値少く、そが縱令釋迦金口の直說に非ずとするも、其中に表はれたる雄大壯麗なる宗教思想としての眞價は、毫も減損せざると同一なりとす。この意味に於て倭論語もその署名せる各時代の選者の實際撰せしものに非ずとするも、その思想內容上の價値に至りては、寸毫も損益なきなり。若し倭論語の中に存する思想にして、金玉の響あらんか、その作者の如何に由らず、千歲不磨の眞理を傳ふるものと認めざるを得ざるなり。矧や之を外にしても、倭論語の中に表はれたる思想を點檢するに、特に吾人の興味を惹けるものあり、そは本書の根本思想が、全然日本思想を中心とし、以てそを潤色するに印度支那思想を以てせるといふ事實是なり、倭論語に表はれたる思想に於ては神儒佛三教は渾然たる一體をなし、讀者を

して儒佛の二教も最早外來の輸入品に非ざるやの感を惹起せしむるまでに、我國風に同化順應して利用せられたるを見る、而してその間依然日本建國の精神を中樞とし本幹として儒佛の二教はその末梢枝葉の位置に置かれて取扱かはれたるものなり、又以て如何に本書に於て日本精神の汪溢、我國民同化力の旺盛なるものあるかを想見するに足るものあるなり。此意味に於て歐米人の日本を研究せんとするものに在りては先づ本書を繙かば、日本の國民性を領得する上に於ても、多大の利益あるべきは、余の信じて疑はざる所なり、而し斯く日本思想を中心として、外國文明をその潤色とし、此兩者は根幹枝葉の關係を以て、唇齒輔車互に相助け相補はしむるものあるは、實に我國民精神の特色にして、古今に一貫せるものなりと雖も、特にそが著しく我思想上の產物たる文學宗教道德美術等の上に表はれたるは、鎌倉時代に始まる、佛教に在りては淨土諸宗を初めとして、日蓮の法花宗が鎌倉時代に於て、日本佛教の粹を表はしたるは云ふまでもなく、神道家としては彼の足利時代に於ける卜部兼倶が、日本固有思想たる神道を中心として、儒佛の二教をその潤色となし、神本佛迹の本地垂迹說に基礎を置きしが如き實に當時の時代精神を最も能く代表せるものなり。而して倭論語の思想に至りても全篇に亙りて、主として此卜部式日本精神の發揮に非ざるは無し、是れ本書の特に吾人

の注意を惹きし主要なる點なり。再言せば前既に述べし如く、倭論語は縱令その一々の記事に於て、歷史的正確を闕如し、此意味に於て歷史的價値に闕如せるも、その中に含める思想に至りては千古不磨の眞理を藏するものあるはいふまでもなく、更に進みてその叙述の中には、日本精神卽ち日本我の活躍せるものあり、日本の根本精神を中心として而も外來思想の長所を利用し、以て我れの短を補はんとせる我國民性の反響ならざるはなし。既にそは我國民性の反影なり、此意味に於て嚮者にその歷史的價値なきものと評せられたる倭論語は、更に又歷史的の新意味を生じ來れるを知る。何を以て之をいふか、曰く他なし、倭論語の中に記載せられたる一々の作者、及びその略傳等史實に照しては、一々信を置難きものあるは勿論にして、此點に於て倭論語は史的價値に乏しと雖も、斯かる點を外にして、倭論語全篇に通ぜる思想は、鎌倉時代以後特に汪溢し來りし時代精神の反影、我國民的精神の勃興の直寫なりと見るを得るに至りては、誰れか倭論語を以て歷史上よりも、寸毫價値無きものと貶黜し去るを得んや。何となれば我國民性の一特色の發現を見んとするは、本書亦その好資料なるを以てなり。實に余が余の專門の學たる宗敎學の方面より見て、倭論語の研究に興味を有するに至りしも、その一原因はまた此に存すと斷言するを憚からざるなり。